京田辺の文化振興を考える市民フォーラムの概要

京田辺市文化振興計画の策定に当たり広く市民のみなさんの声を聞くとともに、これからの文化振興を市民のみなさんとともに考えていくため、50 回目を迎える京田辺市民文化祭において、パブリックコメントの一環として「京田辺の文化振興を考える市民フォーラム」を開催しました。

日時	平成 27 年 10 月 31 日（土）　午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分
場所	田辺中央体育館
内容	・文化振興計画概要説明 現在策定を進めている京田辺市文化振興計画（案）の概要を説明。 ・テーブルトーク 「文化財の保存・活用」「市民文化活動の活性化に向けて」「文化振興を担う人材の育成」のテーマごとに３つのグループに分かれて、計画の策定に携わっている文化振興懇話会委員や担当職員と意見交換を実施。 ＜文化振興懇話会委員＞ 潮義行さん（京田辺市文化協会会長） 澤井信子さん（NPO 法人 Office AMATI 代表） 藤本玲舟さん（京田辺芸術家協会会長） ・全体まとめ 文化振興懇話会委員が各テーブルで出された意見やそれに対する感想等を発表。
来場者数	テーブルトーク参加者 21 名、傍聴者 20 名

【フォーラム風景】

●テーブルトークで出された主な意見

（１）文化財の保存・活用

［文化振興懇話会委員：潮義行さん、参加者８名］

・学校で使用する歴史教材を作成してもらいたい。同時に教師を対象とした歴史教材もあればいい。
・市教委が中心となって民具を収集し、学校で教材として使用してもらいたい。
・伝統行事を学校の教材として使用してもらいたい。
・子どもを対象とした体験学習や出前授業を充実してもらいたい。
・子ども達が地域の伝統行事に参加できるような仕組みづくりが必要。
・文化財保護は行政の役割が大きいので、京田辺市にも文化財を専門とする課をつくるべき。
・文化財の収集・保存・研究・展示・教育普及を充実してもらいたい。
・市教委と京田辺市郷土史会との連携を強化してもらいたい。
・市教委と京田辺市観光協会との連携を強化してもらいたい。
・市教委と京都府立山城郷土資料館との連携を強化してもらいたい。
・ふるさと納税を文化財の保護に活用してもらいたい。
・市内の企業から寄附を募り、文化財の保護に当ててもらいたい。
・市内の古墳にガイダンス施設やトイレを整備してもらいたい。
・文化財（点）と文化財（点）を結ぶ移動手段を設けてもらいたい。
・歴史資料館を造る場合、現物を展示するスペースは小規模でもいいが、その分電子データをフル活用した施設にしてもらいたい。
・歴史資料や民俗資料を電子化し、図書館や新歴史資料館で公開してもらいたい。
・市内の貴重な文化財の散逸を防ぐために、文化財を保管できる施設を設けてもらいたい。
・市内の文化財案内版を充実してもらいたい。
・市民向けの文化財講座を充実してもらいたい。
・市民に対して文化財の補助金情報を提供してもらいたい。
・新たな京田辺市史を編纂する際は、古代の部分をしっかりと扱ってもらいたい。
・新たな京田辺市史を編纂する際は、民俗の部分をしっかりと扱ってもらいたい。
・新たな京田辺市史を編纂する際は、偽文書とされる椿井文書の問題から逃げないでもらいたい。

（２）市民文化活動の活性化に向けて

［文化振興懇話会委員：澤井信子さん、参加者７名］

・家庭と地域コミュニティの再生なしに、市民文化活動は活性化しない。
・シニアが中心となった団体が京田辺の文化を支えている現状を認識することが大切。
・若い人に市内の文化活動を積極的に広報すべき。
・時代に合った情報発信（広報）が大切。
・文化活動に青年層や壮年層が参加する仕組みづくりが必要。
・小さい頃から気軽にお茶に触れる機会を設ける必要がある。
・市民文化活動を活性化させるには、練習や発表の場となる小ホール・大ホールが必要。
・本格的な展示をできる施設が必要。
・本格的なコンサートホールが必要。
・中央公民館などの既存施設は音楽には不向き。
・５年以内にホールを建設してもらいたい。
・交通アクセスのいい場所にホールを建設してもらいたい。
・ホールができたら、誰もが平等に利用できるようにしてもらいたい。
・ホールの規模は 300 人とか、800 人とか。
・アルプラザと連携してホールを造ってもらいたい。
・箱物を造るかは慎重に検討すべき。
・京田辺市は南山城地域の中心なのに、他市の文化施設を使用しなければならない現状は、残念。
・図書館のギャラリーを改善してもらいたい。
・図書館を気軽にコーヒーを飲んだりできる場所にしてもらいたい。
・文化サークルの活動を子どもに知ってもらうために、学校で体験させる機会を設けてもらいたい。
・学校ごとに年１回は文化イベントを催してもらいたい。
・子どもが文化活動に対して興味を持ち、やる気を起こさせるような仕組みづくりが大切。
・行政が主役ではなく、市民が主役の文化にすることが望ましい。
・小さな取り組みからスタートし、ゆくゆくは大きな花を咲かせるようなスタンスが大切。
・市のリソースを文化面に集中的に投入してもらいたい。

（３）文化振興を担う人材の育成

［文化振興懇話会委員：藤本玲舟さん、参加者６名］

・子どもの頃から文化に触れる機会づくりが大切。
・学童保育で人材バンクの登録者を活用した文化イベントを行ってもらいたい。
・目先ではなく、長期的な視点に立った人材育成の取り組みが必要。
・不断の啓発活動が大切。
・人材育成のための養成講座を設けてもらいたい。
・公募展による人材の発掘が必要。公募展は文化活動のきっかけづくりになる。
・文化活動の指導者が高齢化している問題がある。
・指導者の養成が難しい。指導者がいなくなると、その文化活動のノウハウが断絶する。
・各文化団体は高齢化による活動人数減少という悩みを抱えている。
・各文化団体は若手人材が育っていない。
・文化活動を個人ではなく団体で行うと、役の負担が大きいので、それを軽減する工夫が必要。
・社会全体が企業活動中心となっていて、文化活動に当てる時間が取れない人が多い。
・伝統行事を継承していくには、何よりも気持ちが大切。
・市教委は同志社大学と連携して、人材育成に努めてもらいたい。
・文化活動の金銭的な負担が大きくなると、文化活動が縮小してしまう。
・文化サークルの活動への公的補助を充実してもらいたい。
・文化活動の練習場所や発表場所をどう確保するのかが課題。
・貸し館のルールを適宜見直していく必要がある。